

熊本大学
永青文庫研究センター

年 報

第11号

2020

熊本大学永青文庫研究センター

はじめに

2019年度は、永青文庫研究センターが学内共同教育研究施設となって3年目を迎え、研究面で新たな取組みが開始された年となった。今村直樹准教授を研究代表者とした科学研究費補助金基盤研究（B）を財源に、旧熊本藩惣庄屋古閑家に伝来した文書群の基礎目録作成が開始されたのである。惣庄屋は熊本藩の中間行政機構である手永の管理責任者として地方行政の中核を担った役人であり、「古閑家文書」は質量ともに突出した惣庄屋家文書群として貴重である。その内容解析は、新しい近世社会論を切り拓くための基礎となる研究と位置づけられる。

昨年度から開始した熊本藩主席家老松井家文書（熊本大学所蔵）の目録作成事業も、順調に進んでいる。ただし虫損等によってコンディションの良くない文書も多く、個別には調査に多くの時間を費やさざるを得ないケースも多い。それでも、本年報でも報告している名古屋城公儀普請関係文書など、新たな発見も相次いでいる。

古閑家文書、松井家文書の内容がデータ化され、すでにデータ化されている永青文庫の藩政史料や当主決裁文書群等と併せて利用できる条件が整えば、代表的な国持大名である細川家の政治行政（統治）や意思決定過程の総体——村社会から藩主に至るまで——に迫ることができるようになる。これらの目録作成事業は、本学そして熊本の類稀なる歴史文化資源を十分に活用するための条件を構築し、もって日本史研究全体の進展に資するものであり、本センター固有の事業として、引き続き注力していく所存である。

また、本年度は第2期『永青文庫叢書』（吉川弘文館）シリーズの2冊目として、「島原・天草一揆編」の刊行を実現することができた。本書の編集にあたってみて、一揆を攻めた側の大家に蓄積された史料群の総体的分析による一揆史の叙述可能性に手ごたえを感じている。さらに、研究紀要『永青文庫研究』第3号も刊行され、永青文庫資料等を対象にした研究の着実な展開ぶりを示すことができた。

社会貢献の面では、熊本県立美術館に協力した展覧会「熊本城と武の世界」が開催され、本センターのスタッフも図録の執筆や講演を担当した。さらに、2020年1月から放送開始された大河ドラマ「麒麟がくる」に関連するNHKのTV番組の制作への協力や、2020年4月から東京・永青文庫にて始まる展覧会「新 明智光秀論」の共催を通じて、永青文庫の信長・光秀文書に関する本センター研究の成果をひろく発信する機会にも恵まれた。

永青文庫研究センターは、スタッフ一同の協力のもとで、研究・社会貢献事業を引き続き発展させていく。関係各位のご指導・ご鞭撻をお願いしたい。

2020年3月3日

熊本大学永青文庫研究センター長
稲葉 継陽

目 次

はじめに	1
1. 年間活動記録	4
2. 年間活動報告	12
(1) 組織運営	12
(2) 研究活動	12
(3) 展覧会・講演会・社会貢献等	15
(4) センターの運営資金	17
3. 個人年間活動	18
4. 講演要旨	
(1) 稲葉 継陽	
細川幽斎「古今伝授」と「天下統一」	24
(2) 今村 直樹	
細川家歴代当主の甲冑と明治維新	26
(3) 後藤 典子	
1620年代 細川家の葡萄酒製造とその背景	30

1. 年間活動記録

日付	活動内容	担当等
2019年4月1日	附属図書館高木氏・浜崎氏来訪 熊本日日新聞飛松氏来訪・取材	稲葉・高木・浜崎(図書館) 後藤・飛松(熊日)
4月2日	熊本県博物館ネットワークセンター資料調査 附属図書館山田館長来訪	今村・三澤 稲葉・山田(図書館)
4月3日	熊本日日新聞魚住氏来訪・取材	稲葉・魚住(熊日)
4月4日	熊本日日新聞飛松氏来訪・取材	稲葉・飛松(熊日)
4月5日	京都出張、研究会参加・資料調査(～6日)	今村
4月8日	松井家文書修復打合せ	稲葉・今村・浜崎(図書館)・宰匠
4月9日	熊本県文化課長ら8名来訪、着任挨拶	稲葉・熊本県文化課
4月13日	北九州市立いのちのたび博物館講演会 小倉出張	稲葉 稲葉・後藤
4月14日	熊日出版文化賞受賞記念祝賀会	
4月15日	馬田氏来訪・所蔵文書調査	稲葉・後藤
4月18日	熊本県教育長来訪・貴重書庫見学	稲葉・今村・後藤・宮尾・古閑(教育長)
4月19日	カマノ商会江上氏来訪・撮影打合せ	今村・江上(カマノ商会)
4月20日	姫路出張(～21日)	稲葉
4月21日	兵庫県立博物館友の会講演会	稲葉
4月24日	肥後銀行笠原頭取来訪・貴重書庫見学	稲葉・今村・後藤・笠原(肥後銀行)
4月25日	東京出張、出版打合せ(～26日) 小国出張、小国町政史料調査(～26日)	稲葉・清水(明大) 今村
4月27日	熊本被災史料レスキューネットワーク主催 シンポジウム「文化財の被災と救済 3年 目の中間報告」開催(於熊本県立美術館)	稲葉・今村・後藤
5月7日	熊本県文化課内堀氏・川路氏来訪	今村・内堀・川路(熊本県)
5月8日	熊本県文化財保護協会役員会(於熊本県庁)	稲葉
5月9日	熊本日日新聞飛松氏来訪・取材	稲葉・飛松(熊日)
5月10日	東京出張、研究会参加(～12日) 名古屋・東京出張、研究会参加(～12日)	稲葉 今村
5月11日	東京出張(～13日) 歴史学研究会中世史部会報告(於立教大学) 近現代史研究会報告(於名古屋大学)	後藤 稲葉 今村
5月12日	永青文庫所蔵古文書セミナー(於日本女子 大学)	後藤
5月14日	NHK 志賀記者来訪・取材	稲葉・志賀(NHK)

日付	活動内容	担当等
	URA 藤山氏来訪・打合せ	稲葉・藤山(URA)
5月17日	東京出張、永青文庫資料調査	今村・伊藤(永青文庫)
5月20日	松井家文書目録作成調査(～24日)	参加者：11名
5月22日	読売新聞丸茂記者来訪・取材	稲葉・後藤・丸茂(読売)
5月24日	東京出張、研究会参加(～27日) 中村青史氏・向井ゆき子氏来訪	稲葉 今村・中村・向井
5月25日	東京出張、熊本藩研究会打合せ・歴史学研 究会大会参加(～26日) 歴史学研究会大会中世史部会報告(於立教 大学)	今村・神谷(東海大)・小関(千葉 大)・白石(宮内庁)・高槻(神戸大) 稲葉
5月30日	読売新聞若村記者来訪・取材	稲葉・若村(読売)
5月31日	東京出張、資料調査(～1日)	今村
6月1日	永青文庫所蔵古文書セミナー(於日本女子 大学) 熊本史学会春季大会報告	今村 稲葉
6月4日	甲佐町教育委員会上高原氏来訪・打合せ	稲葉・上高原(甲佐町)
6月5日	松井家文書修復打合せ	今村・富永米山堂
6月6日	本田光子氏来訪・打合せ	稲葉・今村・本田(文化財保存修 復学会)
	熊本県立美術館才藤氏来訪・展覧会打合せ	稲葉・今村・後藤・才藤(県美)
6月7日	京都出張、明治維新史学会大会参加(～10日)	今村
6月12日	永青文庫伊藤氏来訪・打合せ 甲佐町教育委員会上高原氏来訪・打合せ	稲葉・今村・後藤・伊藤(永青文庫) 稲葉・上高原(甲佐町)
6月13日	富士マイクロ後藤氏来訪・撮影打合せ 大分県竹田市教育委員会佐伯氏来訪・打合せ 熊本県文化課帆足氏来訪・打合せ	今村・坂口・後藤(富士マイクロ) 稲葉・今村・佐伯(竹田市) 稲葉・帆足(熊本県)
6月14日	東京出張、出版打合せ 氷川収蔵庫資料整理(文化財レスキュー事業) 熊本市河内まちづくりセンター所蔵資料調査	稲葉・清水(明大) 今村・内堀・川路(熊本県) 今村
6月20日	菊池市教育委員会西住氏来訪・打合せ	稲葉・西住(菊池市)
6月22日	文部科学省 GP プログラム講演会(於熊本 大学)	稲葉
6月23日	六角家文書研究会報告(於九州大学)	今村
6月24日	松井家文書目録作成調査(～28日)	参加者：12名
6月28日	工学部伊東教授来訪・打合せ	稲葉・今村・伊東(工学部)
7月1日	古閑家文書調査取材	今村・飛松(熊日)
7月3日	永青文庫研究センター運営委員会	センター運営委員

日付	活動内容	担当等
7月5日	名古屋・東京出張、研究打合せ（～7日）	今村
7月6日	近現代史研究会大会報告（於名古屋大学） 肥後の里山ギャラリー講演会	今村 稲葉
7月9日	国立大学協会理事貴重書庫見学	稲葉・国大協理事
7月10日	松井家文書修復打合せ	今村・富永米山堂
7月12日	東京出張（～13日）	稲葉
7月16日	インタージャム水ノ江氏来訪・撮影打合せ カマノ商会江上氏来訪・撮影打合せ	稲葉・今村・坂口・水ノ江（インタージャム） 今村・江上（カマノ商会）
7月17日	共同通信東記者来訪・取材	稲葉・後藤・東（共同通信）
7月20日	熊本大学所蔵「松井家文書」調査 市民セミナーNo.1「加藤清正と名古屋城天守石垣」開催	熊本大学附属図書館1F 稲葉・後藤 参加者：98名
7月22日	松井家文書目録作成調査（～26日）	参加者：11名
7月23日	熊本日日新聞記者来訪・打合せ	稲葉・迫（熊日）
7月24日	松井家文書修復打合せ	今村・富永米山堂
7月25日	竹田市納池公園名勝地調査委員会（～26日）	今村
7月30日	松井家文書修復打合せ	今村・宰匠
7月31日	熊本県文化財保護審議会（於熊本県庁）	稲葉
8月1日	菊池市教育委員会西住氏来訪	稲葉・西住（菊池市）
8月2日	熊本県立美術館才藤氏来訪・展覧会打合せ	稲葉・今村・後藤・才藤（県美）
8月3日	ふるさと歴史講座講演（於柳川市大和生涯学習センター）	今村
8月5日	文化財レスキュー事業資料整理会（於熊本県博物館ネットワークセンター、～6日）	今村・三澤
8月8日	東京出張（～16日） 永青文庫訪問・資料調査（9・10日）	後藤
8月19日	熊本県文化課内堀氏来訪・打合せ 熊本県建築士会山川氏来訪・打合わせ	今村・内堀（熊本県） 稲葉・山川（熊本県建築士会）
8月22日	熊本県立美術館才藤氏来訪・展覧会打合せ	稲葉・今村・後藤・才藤（県美）
8月24日	熊本県立美術館「菊池一族の戦いと信仰」展 特別講演会（於熊本県立美術館）	稲葉
8月26日	松井家文書目録作成調査（～30日）	9名
8月28日	肥後の里山ギャラリー小堀館長来訪	稲葉・小堀（里山ギャラリー）
8月29日	熊本さわやか大学校講座（於県総合福祉センター）	稲葉

日付	活動内容	担当等
8月31日	「比較藩研究」シンポジウム関連書籍出版会議、現地調査（～1日）	稲葉・今村・三澤・安高・小関（千葉大）・白石（宮内庁）・高槻（神戸大）・神谷（東海大）・木越（石川県）・金森（秋田県）
9月2日	永青文庫基金活用委員会（於熊本県庁）	稲葉
9月3日	熊本さわやか大学校講座（於八代ハーモニーホール）	稲葉
9月4日	六角家文書研究会参加（於九州大学） 熊日出版甲斐氏来訪・出版打合せ	今村 稲葉・甲斐（熊日出版）
9月5日	人吉出張（～6日）	稲葉・後藤
9月6日	熊日出版沼田氏来訪・出版打合せ	稲葉・沼田（熊日出版）
9月17日	松井家文書目録作成調査（～20日）	参加者：8名
9月21日	科研費研究会（～22日）、現地調査	稲葉・今村・三澤・矢野（島根県）・胡（愛媛大）・定兼（岡山県）・木越（石川県）・久留島（歴博）・酒井（聖心）
9月23日	静岡出張（～24日）、静岡県地域史研究会シンポジウムコメント	今村
9月25日	東京・福井出張（～30日）	稲葉
9月26日	松井家文書修復打合せ	今村・富永米山堂
9月27日	東京・福井出張（～30日）	後藤
9月28日	永青文庫所蔵古文書セミナー（於永青文庫） 八代市立博物館未来の森ミュージアム特別講演会「熊本藩士たちの明治維新」講演（於八代市立博物館）	稲葉 今村
9月29日	若狭町歴史環境講座「光秀・幽斎と熊川」講演会（於若狭町歴史文化館）	稲葉
10月1日	大阪出張、文化財保存修復学会打合せ（～2日）	今村
10月2日	東京出張、出版打合せ（～3日）	稲葉
10月8日	氷川収蔵庫資料整理（文化財レスキュー事業）	今村・内堀・川路（熊本県）
10月11日	第一高校同窓会講演打合せ	後藤・山崎（清香会）
10月17日	八代市立博物館林氏来訪・資料貸借 熊本県文化財保存活用大綱策定委員会	稲葉・林（八代市博） 稲葉
10月18日	松井家文書目録作成調査（～24日） 熊本古書展講演会（於鶴屋ホール） 熊日出版沼田氏来訪・出版打合せ	参加者：8名 稲葉 稲葉・沼田（熊日出版）
10月21日	水前寺まつり講演会打合せ 熊本史料ネット事務局会議	稲葉・岩水（出水神社） 稲葉・今村

日付	活動内容	担当等
10月24日	中国国家図書館館長来訪・永青文庫資料閲覧	稲葉・後藤
10月26日	熊本県立美術館「熊本城と武の世界」展開会式出席（特別協力：～12/15）	稲葉・後藤
	「肥後五か町シンポジウム」講演（於玉名市文化センター）	今村
10月27日	第14回ホームカミングデー、貴重資料展解説	今村
10月29日	東京大学史料編纂所高橋・林所員来訪、資料調査	稲葉・今村・後藤・高橋・林（東大）
	熊本県立美術館才藤氏来訪	稲葉・今村
10月30日	「そなえる防災講座」講演（於熊本市中央公民館）	稲葉
11月2日	第35回貴重資料展「熊本藩に生まれた近代—手永・惣庄屋制と地域行政—」開催（～4日）	来場者：391名
	第14回永青文庫セミナー「熊本藩政と手永・惣庄屋制—近代地方自治の胎動—」開催	熊本大学附属図書館1F 今村 参加者：120名
11月6日	東京出張（～7日）	今村
11月8日	文部科学省職員貴重書庫見学	稲葉・文科省職員
11月9日	国立大学協会エクスカーション、貴重資料展解説	今村
	国指定史跡棚底城跡シンポジウム「天草が誇る戦国の城跡」講演（於天草市民センター）	稲葉
11月10日	西原一町内文化祭講演会	稲葉
11月12日	東京大学史料編纂所山口・及川・高島・林所員来訪、資料調査（～14日）	稲葉・今村・後藤・山口・及川・高島・林（東大）
11月14日	熊本県派遣職員向け講演会（於熊本市役所）	稲葉
11月15日	九州城郭研究会山崎氏来訪・打合せ	稲葉・山崎（城郭研究会）
	宇土市歴史的資料保存活用事業運営委員会	今村
11月16日	京都出張（～17日） 与謝野町講演会（於野田川わーくぱる）	稲葉
11月19日	文化財レスキュー事業資料整理会（於熊本県博物館ネットワークセンター、～20日）	今村
11月20日	施設課概算要求打合せ	稲葉・村上（人文）・施設課
	熊日出版沼田氏来訪・出版打合せ	稲葉・沼田（熊日出版）
	東京出張、NHK番組撮影（～21日）	稲葉
11月23日	熊本県立美術館「熊本城と武の世界」特別講演会	今村
11月25日	松井家文書目録作成調査（～29日）	参加者：9名
	東京出張、NHK番組収録（～26日）	稲葉

日付	活動内容	担当等
11月28日	菊池氏に関する奨励研究中間報告会（於菊池市役所）	稲葉
12月2日	科学技術振興機構理事、貴重書庫見学	稲葉・福和理事（JST）
12月4日	永青文庫資料、NHK番組撮影（於附属図書館）	稲葉
	八代小学校樋口氏来訪	今村・樋口（八代小学校）
12月5日	人吉出張	稲葉
	氷川収蔵庫資料整理（文化財レスキュー事業）	今村・内堀・川路（熊本県）
12月6日	長野家訪問、資料返却（文化財レスキュー事業）	今村
12月7日	水俣市「戦国時代の境目・水俣」講演会（於水俣環境アカデミアセミナー室）	稲葉
12月8日	九州城郭研究大会報告（於美里町中央公民館）	稲葉・後藤
12月9日	熊日出版沼田氏来訪・出版打合せ	稲葉・沼田（熊日出版）
	八代市立博物館宮原氏来訪・資料返却	稲葉・宮原（八代市博）
12月10日	NHK特番関係対談収録	稲葉・藤田（三重大）
12月12日	松井家文書修復打合せ	今村・富永米山堂
	三宅久美子氏来訪・所蔵資料調査	稲葉・今村・三宅
12月15日	永青文庫細川護光氏・林田氏、懇親会	稲葉・今村・後藤・細川・林田（永青文庫）
12月17日	熊本県博物館ネットワークセンター企画展打合せ	今村・三澤・中村・堤（博物館ネットワークセンター）
12月18日	松井家文書修復状況の視察（於九州国立博物館）	今村・宰匠
12月19日	文化財保存修復学会打合せ・会場下見	稲葉・今村
12月21日	静岡・名古屋出張、シンポジウム参加・資料調査（～23日）	今村
12月22日	新甲佐町史歴史研修会講演（於甲佐町役場）	稲葉・後藤
	地域歴史文化大学フォーラム（於名古屋）参加	今村
12月24日	読売新聞池田氏来訪・取材	稲葉・池田（読売）
12月26日	肥後の里山ギャラリー小堀氏来訪・打合せ	稲葉・小堀（里山ギャラリー）
	熊本県文化財保存活用大綱についての打合せ	稲葉・三澤・今村
2020年1月1日	「本能寺の変サミット2020」（NHKBSプレミアム）放送	
1月7日	熊本県文化財保護活用大綱検討委員会	稲葉
	熊本県民テレビ石田氏来訪・取材	今村・石田（KKT）
1月8日	熊本史料ネット事務局会議	稲葉・今村

日付	活動内容	担当等
1月15日	コロニー印刷榎田氏来訪・出版打合せ	今村・榎田（コロニー）
	静岡市文化振興財団廣田浩治氏来訪	今村・廣田（静岡市）
	熊本日日新聞飛松氏来訪・取材	稲葉・飛松（熊日）
	熊日出版沼田氏来訪・出版打合せ	稲葉・沼田（熊日出版）
	熊本県立美術館才藤氏来訪・資料返却	稲葉・才藤（県美）
	東京出張（～16日）	稲葉・後藤
1月16日	東海大学神谷氏来訪・資料調査（～17日）	今村・神谷（東海大）
1月17日	熊本日日新聞飛松氏来訪・取材	稲葉・飛松
	永青文庫林田理事来訪	稲葉・林田（永青文庫）
1月20日	松井家文書目録作成調査（～24日）	参加者：11名
	松井家文書修復打合せ	今村・富永米山堂
1月28日	RKK 福居氏来訪・取材	稲葉・後藤・福居（RKK）
1月29日	熊本県肥後学講座（於くまもと県民交流館パレア）	稲葉
	熊日出版訪問・新書、校正最終確認	稲葉
1月30日	菊池市委員会 菊之城跡調査検討委員会	稲葉
1月31日	熊本県文化財保護審議会	稲葉
2月6日	文化財保存修復学会打合せ（於熊本市現代美術館）	今村
	永青文庫伊藤氏来訪・資料調査	稲葉・伊藤（永青文庫）
2月7日	名古屋・神戸出張（～9日）、毎日新聞取材対応	今村・加藤（毎日新聞）
	人吉城跡整備活用検討会議	稲葉
2月8日	神戸出張、第6回全国史料ネット研究交流集会出席（～9日）	今村
2月15日	静岡・東京出張（～17日）、江川文庫調査	今村・橋本（江川文庫）
2月16日	日印朝科研研究会報告	今村
2月17日	永青文庫叢書島原・天草一揆編 納品	
	片岡家古文書調査	稲葉・後藤
	竹田市教育委員会来訪・資料調査（～18日）	今村
2月18日	東京出張（吉川弘文館・永青文庫、～19日）	稲葉・後藤
2月20日	大分出張（～21日）	今村・三澤
	高見洋三氏来訪、古文書寄贈の相談	稲葉・附属図書館担当者
2月22日	小倉出張（細川家葡萄酒製造に関する研究成果報告と情報交換等、～23日）	稲葉・後藤
2月26日	人吉城跡整備活用専門会議	稲葉
2月26日	松井家文書目録作成調査（～28日）	参加者：12名

日付	活動内容	担当等
3月4日	菊池市委員会 菊之城跡調査検討委員会	稲葉
3月5日	甲佐町教育委員会 陣ノ内城調査検討委員会	稲葉
3月6日	松井家文書修復打合せ	稲葉・今村・後藤・富永米山堂
3月10日	中央大学宮間氏来訪	今村・宮間（中央大） 吉岡（明治学院大）
3月12日	名古屋・東京出張、資料調査・研究打合せ（～15日）	今村
3月17日	松井家文書修復分返却	稲葉・今村・後藤・富永米山堂
3月19日	松井家文書修復分返却	稲葉・今村・後藤・宰匠
3月23日	文化財等復旧復興基金活用動産文化財検討委員会（於熊本県庁）	稲葉
3月30日	宇土市歴史の資料保存活用事業運営委員会	今村

2. 年間活動報告

(1) 組織運営

本年度の運営は、主として専任教員の稲葉継陽教授、今村直樹准教授が担い、兼務教員として三澤純准教授、安高啓明准教授がこれに協力した。また後藤典子特別研究員が基礎研究分野での古文書解読等を担うとともに、科学研究費補助金基盤研究（B）（研究代表者・今村）によって雇用されている大学院社会文化科学教育部及び文学部の学生も、史料のデータ化等の実務にたずさわった。なお、本センターの兼務教員であった竹島一希准教授は2019年3月をもって転出した。

上記のスタッフによるミーティング、永青文庫研究センター運営委員会を通じた運営は、おおむね円滑に進められた。

本センターの研究活動、社会貢献活動が順調に展開されている事実は、2018年度に実施した組織評価（自己評価）、同年度末に実施された行動計画の遂行評価Sという結果にも表れている。

(2) 研究活動

1) 永青文庫細川家文書の画像データ蓄積と分析

本年度は永青文庫細川家文書の藩政史料について、新たなデータの蓄積を行った。

撮影を実施したのは、地方行政担当の藩政部局である郡方の記録帳簿群である「覚帳」（近世中期分）、「覚帳」収録案件の索引をまとめた「覚帳頭書」、近世後期の藩政・地域行政関係資料群である。

撮影された画像データは、『永青文庫叢書 細川家文書』の出版や熊本大学附属図書館貴重資料展などに活用されるとともに、基礎研究の一層の推進のための基礎データとして分析が深められる予定である。

2) 惣庄屋史料古閑家文書の目録作成及び共同研究の推進

近年の熊本藩をめぐる研究では、同藩の地域行政機構である手永の自治的活動に大きな注目が集められている。手永の管理責任者は百姓身分出身の惣庄屋であるが、その惣庄屋史料の代表的な存在と言えるのが古閑家文書（古閑孝氏所蔵）である。古閑家文書は、これまで熊本県立図書館や熊本市などの調査が行われており、その成果は『新熊本市史』にも反映されている。しかし、これまで調査対象とされてきたのは膨大な文書群の一部であり、その全容把握が必要とされていた。

2016年4月の熊本地震後、古閑家文書は熊本被災史料レスキューネットワークによるレスキュー活動で救出され、熊本大学への将来的な寄贈・寄託を前提に、文学部の教員研究室で保管されている。古閑家文書の総点数は2万点以上と推測される。この質量とともに第一級の惣庄屋史料の総目録を作成し、熊本大学が保管する「熊本藩関係貴重資料群」（細川家文書や松井家文書など）と総合的に解析することで、近世大名領国における藩政の意思決定構造の全体像

及び地域行政組織の活動実態の解明が見込まれる。また、そこで得られた成果を全国的な国持大名領などの事例と比較検討することで、熊本藩の事例がもつ普遍性と特殊性が浮かび上がるはずである。

こうした問題意識のもと、今村直樹准教授を研究代表者として申請された「『熊本藩関係貴重資料群』の総合的解析による日本近世の意思決定構造の実証的研究」が科学研究費補助金基盤研究（B）に採択され、本年度から2022年度までの4年間、研究費の配分を受けることとなった。そこで、本年度から本センターでは、①古閑家文書の目録作成、②熊本藩と同様の規模をもつ国持大名領を主たる比較対象とした地域行政組織（組合村・大庄屋など）の比較共同研究に着手した。

①では、今村と科研費で雇用された大学院社会文化科学教育部及び文学部の学生が古閑家文書のクリーニング作業と目録作成に従事し、中性紙保存箱約50箱分のクリーニングを終えるとともに、1,534点の目録を作成することができた。また、本年度の調査では、天保9年（1838）の江戸幕府巡見使の質問に対する熊本藩側の回答書の写（「御巡見様御尋御返書写」）、文化2年（1805）の「石垣秘伝之書」など、貴重な史料を多く発見することができた。調査成果の一部は、第35回熊本大学附属図書館貴重資料展「熊本藩に生まれた近代—手永・惣庄屋制と地域行政—」にも反映されている。

②では、千葉・石川・岡山・島根・愛媛各県から研究者を招き、今後の共同研究に向けた打合せを2019年9月21日に熊本大学で開催した。来年度以降は、年1回のペースで公開の研究会を実施し、科研費の最終年度である2022年度にはシンポジウムを開催する予定である。

3) 熊本大学所蔵松井家文書の目録作成・修復・画像データ蓄積作業

熊本大学附属図書館には、熊本藩の第一家老であった松井家に伝来した古文書・古記録（松井家文書）約40,000点が保管されている。松井家文書は、永青文庫細川家資料と並ぶ第一級の歴史資料群であり、本センターは昨年度から、①同文書の目録作成、②修復、③画像データの蓄積作業に着手している。

本年度の成果として、①の目録作成では、県内外から専門家を集めて、一週間の集中調査を附属図書館で9回実施した（総日数42日、延べ人数245人）。その結果、2,116点の目録を作成することができた。本年度の調査では、細川家に仕えた宮本武蔵の働きがうかがえる寛永19年（1642）の松井興長書状写、寛政4年（1792）の「島原大変肥後迷惑」直前の島原の状況を報じた松井當之書状写など、大変貴重な史料を多く発見することができた。また、本年度からは目録調書のデータ化作業も着手され、2,925点の調書データが入力済である。

②の修復作業では、学術的価値が高い史料のうち、保存状態が悪いものの17点を専門業者に依頼し、修復することができた。

③の画像データの蓄積作業では、一紙文書を中心に約4,000点を撮影することができた。

これら三つの作業は、来年度以降も継続して行っていく予定である。

4) 『永青文庫叢書 細川家文書 島原・天草一揆編』の発刊

永青文庫研究センターは、文学部附属時代である2010年から2014年にかけて、『細川家文書

中世編』、『細川家文書 絵図・地図・指図編Ⅰ』、『細川家文書 近世初期編』、『細川家文書 絵図・地図・指図編Ⅱ』、『細川家文書 故実・武芸編』という5冊の永青文庫叢書を吉川弘文館(東京)から刊行した。これは、永青文庫細川家資料からとくに学術的価値が高い古文書・絵図類を図版入りで刊行したもので、学界などから高い評価を得ている。

以上の第1期に引き続き、昨年度から第2期の永青文庫叢書の刊行を開始した。昨年度吉川弘文館から刊行した『細川家文書 熊本藩役職編』はその第一弾であったが、本年度は2冊目として『細川家文書 島原・天草一揆編』を発刊することができた。

立ち返りキリシタンの一揆として有名な「島原・天草一揆」は、江戸時代はじめの大事件であり、また、中世からみればいわば最後の内戦であり、この一揆の後、日本近世は200年間にも及ぶ世界に類例をみない長期平和＝「天下泰平」の時代を迎える。まさに時代を画する事件であり、基礎史料の研究が求められている。

また2018年、一揆が籠城した原城跡を含む九州の教会やキリシタン関連史跡等が「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として世界遺産に認定された。潜伏キリシタンが世界的に、歴史的に注目されている今だからこそ、島原・天草の一揆の実態とその歴史的意味を明らかにすることは、学術上重要な取組みとなる。

細川家は「島原・天草一揆」において、一揆を制圧する側で中心的役割を担ったため、永青文庫及び旧家臣家には数多くの一揆関係史料が伝来している。本センターでは、永青文庫の歴史資料に限らず、細川家第一家老松井家に伝来し熊本大学が所蔵する「松井家文書」の基礎研究に取組みながら、市井に散在する一揆関係史料をも収集・調査研究し、それらの成果を本書に集約して発表した。収録史料は合計103点の文書・記録・絵図で、その大半が初公開史料である。それらを学界に共有させ、近世初期の永青文庫細川家文書の学術的価値を周知させる点に、本書出版の意義がある。また解説編「島原・天草一揆と熊本藩細川家」は稲葉継陽が執筆し、序文は公益財団法人永青文庫細川護熙理事長に寄稿いただいた。

今後、本書に収録された一次史料に立脚した研究成果の発信に取組んでいきたい。

なお、本センターでは引き続き、来年度以降も「地域行政編」「意見書編」「災害史料編」と、年に1冊ずつ続刊の予定である

5) 紀要『永青文庫研究』第3号の刊行

本センターは、2017年度から研究紀要『永青文庫研究』の刊行を開始した。本年度の第3号には、永青文庫研究センタースタッフ及び学外の研究者からの寄稿により、論文1本、史料紹介2本、書評1本を収録することができた。従来取り組んできた細川家文書・松井家文書の研究成果に加えて、本センターが2019年度に購入した旧熊本藩士・幸家文書に関する成果も含まれている。

第3号の目次は以下の通りである。

論文

島原・天草一揆以前における肥後細川家のキリスト教政策(下) … 後藤 典子

史料紹介

廃藩置県に対する旧熊本藩士の意見書

—幸準蔵「死罪論」について— …… 今村 直樹

『御穿鑿所引取書達控(抄録)』(二) …… 安高 啓明

川端 駆

書評

熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 熊本藩役職編』

…………… 羽賀 祥二

(3) 展覧会・講演会・社会貢献等

1) 第35回 熊本大学附属図書館貴重資料展「熊本藩に生まれた近代一手永・惣庄屋制と地域行政一」(2019年11月2日～11月4日、熊本大学附属図書館と共催)の開催

2) 第14回 永青文庫セミナー 今村直樹「熊本藩政と手永・惣庄屋制—近代地方自治の胎動—」(2019年11月2日、熊本大学附属図書館と共催)

本年度の貴重資料展は、本センタースタッフの協力のもと、今村直樹准教授が担当した。

熊本藩の地方統治は、同時代からも後の時代からも、高い評価を受けていたことが知られる。その理由は、①藩行政の仕組みや官僚制が高度に整備されていたこと、②百姓出身の惣庄屋を責任者とする「手永」(地域行政機構)が、独自の吏員と財源をもち、耕地開発・災害復旧・社会救済などの広範な行政活動を展開したことにある。後者に力点を置いた本展覧会では、細川家文書の藩政史料及び熊本大学が所蔵する松井家文書・井手家文書・粟林家文書などをもとに、近代地方自治制の重要な前提となった手永・惣庄屋制の実態について、近世初期から幕末維新期までの長期的なタイムスパンで明らかにした。熊本地震後の被災史料レスキュー事業で救出された惣庄屋史料である古閑家文書も初公開した。

貴重資料展の入場者数は歴代2位となる391名、永青文庫セミナーの来聴者は120名に達するなど、非常に盛況であった。

3) 熊本県立美術館 熊本城大天守外観復旧記念展「熊本城と武の世界」(2019年10月26日～12月15日)への特別協力

加藤清正が築いた熊本城は、加藤家の後に熊本を治めた細川家によって整備され、明治維新までその居城として用いられた。明治10年(1877)の西南戦争では、約50日間におよぶ籠城戦に耐え抜いたことでも知られている。

本展は、桃山時代の築城から明治時代に至るまでの熊本城の歴史と、それをとりまく加藤家・細川家の武の世界を、美術工芸品や歴史資料からたどったものである。本センターは、近世熊本城に関するこれまでの研究成果をもとに特別協力した。古文書史料の翻刻に助言するとともに、図録では稲葉センター長と後藤研究員が作品解説、今村直樹准教授が特論を執筆した。

また、今村が本展に関連する特別講演「細川家歴代当主の甲冑と幕末維新期の熊本城」を担当し、85名の来聴者があった。

4) 熊本大学所蔵「松井家文書」調査 市民セミナーNo.1「加藤清正と名古屋城天守石垣」の開催 (2019年7月20日)

本センターが昨年度より開始した熊本大学所蔵「松井家文書」の本格的な調査の過程で、加藤清正が名古屋城天守の石垣を一人で構築した事実を示す一次史料の存在が確認された。この文書は、慶長15年(1610)に小倉藩主細川忠興から名古屋城の普請現場に派遣されていた細川家の担当奉行3名が、名古屋城普請の諸大名による分担プランの全体を国元の家老衆に伝えた報告書の原本(4月18日付、縦31.8㍍、横194.9㍍)で、清正の名古屋城天守の普請に関する一次史料としては初の発見である。

文書のタイトルは「名古屋御城御普請衆御役高之覚」。次いで、こう記されている。

御天守 五拾壱万九千八百九拾石 賀藤肥後守

坪数千式百九拾七坪 大石・栗石共ニ御請切

天守台石垣約1,300坪の普請は、清正(役高約52万石)が石垣表面の大石と裏込めの栗石をも含め、単独で担当したのである。本丸の天守以外の普請が細川忠興を含む7名の大名で、また二の丸が11名で分担されているのに比べ、清正の地位は際立っている。

本文書発見の意義は、清正が構築した石垣の完成形態として名古屋城の天守台石垣が絶対的な基準性を有する事実を確定したことにある。熊本城、肥前名護屋城、朝鮮半島の「倭城」、肥後国内の諸城、そして名古屋城。近世初期築城史を貫く一本の太い幹である清正の石垣技術の発展過程の客観的到達点として、名古屋城天守台石垣が唯一無二の価値を有することが、一次史料によって確定されたのである。

本セミナーでは、この新史料等をもとに、以下の市民向け報告を実施した。

報告1 稲葉継陽「清正の天守台普請 新史料発見の意義」

報告2 後藤典子「細川家の名古屋城公儀普請」

当日は名古屋方面をはじめ遠方からの参加者も得て、会場の熊本大学附属図書館には合計98名が来場した。史料調査の成果をいち早く市民に報告する取組みとして意義の深い試みであった。今後も調査成果による様々なセミナーを開催していく予定である。

5) 稲葉継陽『歴史にいまを読む一熊本・永青文庫からの発信一』(熊日新書、2020年3月)の刊行

2015年以来、稲葉継陽教授は俳誌『阿蘇』と『熊本日日新聞』という熊本の二つの媒体で永青文庫資料の研究を基礎にした連載を担当してきたが、それら66本の短い文章によって構成した新書『歴史にいまを読む』を社会貢献活動の一環として刊行した。

構成は、全体を第1部「永青文庫歴史万華鏡」、第2部「歴史にいまを読む」の二部立てとした。第1部には、2015年5月から2019年9月までに『阿蘇』等に発表した短文を収録し、それらは「歴史と故郷」「講演の旅」「江戸時代のグルメと環境」「細川家と天下人たち」「基礎研究からの発信」「災害と歴史学」「歴史学とメディア」という7つの章に編集されている。第2部には『熊本日日新聞』の「くまにち論壇」に同時期に寄稿した文章を中心に収録してある。歴史資料の調査成果、文化財保護行政等への提言、政治・行政の現状についての歴史的観点からの批評などを含む。

6) メディアへの協力

本年も加藤清正の名古屋城天守台普請関係文書の発見、原城攻図の公表、さらに文化財レスキュー事業の進捗状況等、地元紙『熊本日日新聞』や『読売新聞』、それにテレビ番組等を通じて、積極的な情報発信を行った。これら取材への協力活動については、本年報の「年間活動記録」の欄を参照されたい。

このうち、2020年元旦にNHK BSプレミアムで放送された「本能寺の変サミット 2020」は、同年の大河ドラマ「麒麟がくる」に関連して、「本能寺の変」をめぐる諸説を7名の研究者がスタジオで議論するという内容で、稲葉継陽教授がこれに出演した。

永青文庫の59通の織田信長文書のうちには、光秀関連文書が多く含まれ、その厳密な解釈によって、特に天正9年(1581)に丹後国で実施された石高制検地をめぐる織田政権の実情が明らかにされ、「本能寺の変」=政権崩壊を規定する権力的矛盾を把握することができる。このことを一般視聴者向けに説明することで、永青文庫細川家文書の学術的価値について発信することができた点には、意義を見出せる番組内容であった。

7) その他

本センターの専任教員及び兼務教員、特別研究員は、それぞれの永青文庫資料等の研究成果の普及のための講演等を数多く担当した。本年報の「3. 個人年間活動」欄を参照されたい。

(4) センターの運営資金

本年度の永青文庫研究センターの運営資金は、以下の事業費等によった。

- 1) 文部科学省 機能強化経費(プロジェクト分)
- 2) 文部科学省 共通政策課題(文化的・学術的な資料等の保存等)
- 3) 日本学術振興会 科学研究費補助金基盤研究(B)
- 4) 熊本大学 みらい研究推進事業
- 5) 熊本大学 学長裁量経費

3. 個人年間活動

稲葉継陽

各種委員会

人吉城跡調査検討委員、佐敷城跡調査検討委員（芦北町）、宇土城跡調査検討委員、菊之城史跡調査検討委員（菊池市）、棚底城跡整備検討委員（天草市）、上天草市史編纂委員、公益財団法人肥後の水とみどりの愛護基金理事、熊本県文化財保護審議委員、平成29年被災文化財等復旧復興基金配分委員（熊本県）

著書

・『歴史にいまを読む—永青文庫・熊本からの発信—』（熊日出版、2020年3月、全238頁）

論文

- ・「コメント2 戦国期地域社会から近世領国地域社会へ」（『歴史学研究』989、2019年10月、pp.90-94）
- ・「特論 室町・戦国期の菊池氏権力」（熊本県立美術館図録『菊池一族の戦いと信仰』、2019年7月、pp.172-179）
- ・「解説 藤木史学 そのスケールと成り立ち」（藤木久志『戦国民衆像の虚実』高志書院、2019年10月、pp.289-299）
- ・「島原・天草一揆と熊本藩細川家」（熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 島原・天草一揆編』吉川弘文館、2020年3月、pp.301-329）

研究発表

- ・コメント「戦国期地域社会から近世領国地域社会へ」歴史学研究会大会中世史部会、2019年5月26日、立教大学
- ・「戦国期相良氏の権力構造と家臣団地域主義」2019年度熊本史学会春季大会シンポジウム「中世相良氏研究の最前線」、2019年6月1日、熊本県婦人会館

講演

- ・「細川忠利の国づくり」北九州市立自然史・歴史博物館歴史友の会講演、2019年4月13日、北九州市立いのちのたび博物館
- ・「地域史としての熊本藩史」兵庫県立歴史博物館友の会総会講演会、2019年4月21日、兵庫県立歴史博物館
- ・「未指定古文書の被災と救済—文化財レスキュー事業の経験から—」熊本被災史料レスキューネットワーク主催シンポジウム「学んで守ろう熊本の歴史遺産#6 文化財の被災と救済 3年目の中間報告」、2019年4月27日、熊本県立美術館
- ・「熊本地震後 未指定文化財レスキュー活動の3年間—その成果と課題—」熊本大学病院 災害医療教育研究センターキックオフセミナー、2019年6月22日、メルパルク熊本
- ・「細川幽斎と信長・秀吉・家康」里山ギャラリー—歴史・文化講座、2019年7月6日、肥後の里山ギャラリー
- ・「清正の天守台普請 新史料発見の意義」熊本大学所蔵「松井家文書」調査 市民セミナーNo.1

「加藤清正と名古屋城天守石垣」2019年7月20日、熊本大学附属図書館

- ・「室町・戦国期の菊池氏権力」熊本県立美術館「菊池一族の戦いと信仰」展 特別講演会、2019年8月24日、熊本県立美術館
- ・「島原・天草一揆と細川家」熊本さわやか大学校、2019年8月29日、熊本県総合福祉センター
- ・「島原・天草一揆と細川家」熊本さわやか大学校、2019年9月3日、やつしろハーモニーホール（八代市）
- ・「細川幽斎—「古今伝授」と「天下統一」」永青文庫所蔵古文書セミナー2019、2019年9月28日、日本女子大学 新泉山館 1階大会議室
- ・「光秀・幽斎と熊川」若狭町歴史環境講座、2019年9月29日、若狭町歴史文化館
- ・「新しい明智光秀像を求めて」第50回古書籍販売会講演、2019年10月18日、県民交流館パレア
- ・「歴史資料から見る熊本の災害」熊本市そなえる防災講座、2019年10月30日、熊本市中央公民館
- ・「天草最大の激戦地・棚底城—上津浦・栖本・相良氏と棚底城—」国指定史跡棚底城跡指定10周年記念シンポジウム「天草が誇る戦国の城跡」講演、2019年11月9日、天草市民センター
- ・「江戸時代の保田窪 古文書新発見」西原一町内文化祭、2019年11月10日、西原コミュニティセンター
- ・「永青文庫細川家史料と地域史料—文化財レスキュー事業の経験から—」熊本地震の復旧・復興に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る派遣専門職員会議講演会、2019年11月14日、熊本市役所
- ・「新 明智光秀論」よさのみらい大学講座、2019年11月16日、野田川わーくばる（京都府与謝野町）
- ・「戦国時代の境目・水俣—「天下泰平」と水俣—」水俣の歴史講座 第2回 中世・近世編、2019年12月7日、水俣環境アカデミアセミナー室
- ・「戦国社会と堅志田城」第6回九州城郭研究大会、2019年12月8日、美里町中央公民館
- ・「戦国時代の甲佐と陣ノ内城跡」新甲佐町史歴史研修会、2019年12月22日、甲佐町生涯学習センター
- ・「細川家の原資料による島原・天草一揆—「天下泰平」と「一揆」—」くまもと県民カレッジ熊本学（世界遺産）コース、2020年1月29日、くまもと県民交流館パレア

雑誌連載

- ・「永青文庫 歴史万華鏡」（48）～（59）『阿蘇』1044～1055号、2019年4月～2020年3月
- ・「細川家文書の世界」第16～19回『季刊永青文庫』No.106～110、2019年4月・7月・10月、2020年1月

今村直樹

各種委員会

熊本県議会史編纂委員、国指定名勝及び史跡水前寺成趣園復旧整備検討委員会委員、宇土市高月邸保存活用検討会委員、宇土市歴史的資料保存活用事業運営委員会委員、竹田市納池公園名勝地調査委員、愛知県史編さん委員会調査執筆委員、新修豊田市史編さん委員会執筆協力員、伊豆の国市史跡等整備調査委員会委員

論文等

- ・「細川家歴代当主の甲冑と幕末維新期の熊本城」(『熊本城と武の世界』熊本県立美術館図録、2019年10月、pp.192-197)
- ・『熊本藩に生まれた近代—手永・惣庄屋制と地域行政—』(第35回熊本大学附属図書館貴重資料展解説目録、2019年11月、全24頁)
- ・「第五高等学校と熊本藩」(『日本教育史往来』No.244、2020年2月、pp.1-2)
- ・「廃藩置県に対する旧熊本藩士の意見書—幸準蔵『死罪論』について—」(永青文庫研究センター紀要『永青文庫研究』第3号、2020年3月、pp.31-40)
- ・「地域行政アーカイブズと日本近世史研究—小田家文書『河江旧記』の画期性—」(『河江旧記抜書 解説』熊本県博物館ネットワークセンター、2020年3月刊行予定)

研究発表

- ・「近代日本形成期における地域財政の展開—熊本藩領を事例に—」近現代史研究会5月例会、2019年5月11日、名古屋大学文学部
- ・「日本近世・近代史研究における手永研究の可能性—熊本藩を素材に—」六角家文書研究会、2019年6月23日、九州大学西新プラザ
- ・「近代日本形成期における地域財政の展開—熊本藩領を事例に—」第11回近現代史研究会大会、2019年7月6日、名古屋大学文学部
- ・「日本近世・近代史における『手永』研究の可能性—熊本藩を素材に—」科研費研究会、2019年9月21日、熊本大学全学教育棟
- ・「『近世・近代転換期における天竜川沿岸地域と金原明善』コメント」静岡県地域史研究会シンポジウム、2019年9月23日、静岡市男女共同参画センターあざれあ
- ・「近世後期熊本藩の地域財政と地域入用」日印朝科研研究会、2020年2月16日、東京大学農学部

講演

- ・「細川家歴代当主の甲冑と明治維新」永青文庫所蔵古文書セミナー、2019年6月1日、日本女子大学新泉山館
- ・「熊本藩の行政と地域社会—手永・惣庄屋制と「地方自治」—」ふるさと歴史講座、2019年8月3日、柳川市大和生涯学習センター
- ・「熊本藩士たちの明治維新—廃藩後の『細川家中』のゆくえ—」八代市立博物館未来の森ミュージアム特別講演会、2019年9月28日、八代市立博物館未来の森ミュージアム
- ・「近世の五か町と熊本藩政—高瀬を中心に—」肥後五か町シンポジウム in 玉名、2019年10月26日、玉名市文化センター
- ・「熊本藩政と手永・惣庄屋制—近代地方自治の胎動—」第14回永青文庫セミナー、2019年11月2日、熊本大学附属図書館
- ・「熊本藩に生まれた近代—手永・惣庄屋制と地域行政—」国立大学協会総会エクスカージョン、2019年11月9日、熊本大学附属図書館
- ・「細川家歴代当主の甲冑と幕末維新期の熊本城」熊本城と武の世界展特別講演会、2019年11月23日、熊本県立美術館

- ・「古文書を読む」熊日生涯学習プラザカルチャー講座、2019年度毎月第1・第3月曜日、びぶれす熊日会館

後藤典子

論文

- ・「算者吉田光由の肥後下向」(『数学文化』第32号、2019年8月、pp.2-3)
- ・「島原・天草一揆以前における肥後細川家のキリスト教政策(下)」(永青文庫研究センター紀要『永青文庫研究』第3号、2020年3月、pp.1-29)

講演

- ・「1620年代 細川家の葡萄酒製造とその背景」永青文庫所蔵古文書セミナー2019、2019年5月12日、日本女子大学新泉山館 1階大会議室
- ・「細川家の名古屋城公儀普請」熊本大学所蔵「松井家文書」調査 市民セミナーNo.1「加藤清正と名古屋城天守石垣」、2019年7月20日、熊本大学附属図書館

三澤 純

各種委員会

熊本市町界町名審議会委員長、くまもと文学・歴史館協議会委員、御船町文化財保護委員

論文等

- ・「近世後期熊本藩領社会における村庄屋集団の役割」(『史学研究』第305号、2020年3月)
- ・「幕末維新期の『民間社会』像を求めて」(『山口県史の窓』、2020年2月)
- ・「『多様性』をキーワードにして、民主主義と地方自治を考える」(『暮らしと自治くまもと』第156号、2019年10月)
- ・「緒方家文書の中の『鉞脈』について」(熊本大学文学部日本史学研究室『古文書学実習調査報告書』XV、2020年3月)

講演

- ・「新出有馬家文書の概要と井寺古墳関係資料発見の意味」熊本県市町村文化財担当者連絡会議、2019年5月21日、於嘉島町役場
- ・「地域に残された古文書の大切さ—緒方家文書整理作業から見てきたもの—」新甲佐町史歴史研修会、2019年9月28日、於甲佐町役場

安高啓明

各種委員会

大田区立勝海舟記念館(旧清明文庫)整備事業推進委員会委員・展示委員会委員長・作業部会委員長、八代市立博物館未来の森ミュージアム協議会委員、天草市立天草キリシタン館運営委員会委員、上天草市史編纂委員

著書

- ・単著『長崎出島事典』(柊風舎、2019年6月)全417頁
- ・監修『勝海舟』(大田区立勝海舟記念館、2019年9月)全149頁

論文・史料紹介・書評等

- ・単著「勝海舟と長崎海軍伝習所」(『勝海舟』(大田区立勝海舟記念館、2019年9月、130-135頁)
- ・単著「困窮する学芸員」(青木豊・辻秀人・菅根幸裕編『博物館が壊される』雄山閣、2019年9月、83-94頁)
- ・単著「外部資金の導入」(青木豊・辻秀人・菅根幸裕編『博物館が壊される』雄山閣、2019年9月、245-256頁)
- ・単著「熊本藩法制史料の基礎構造—「刑法草書」との相関性の分析を通じて」(藩法研究会編『幕藩法の諸相—規範・訴訟・家族』汲古書院、2019年11月、143-176頁)
- ・単著「刑法草書の運用と罪状認定過程—盗賊・倉庫堅完を事例に」(『熊本史学』第100号、2019年12月)
- ・「熊本藩における入墨者の社会復帰制度」(長屋佳歩と共著)(『法史学研究会会報』第23号、2020年3月)
- ・「史料紹介『御穿鑿所引取書達書控(抄録)』(2)」(川端駆と共編)(『永青文庫研究』第3号、2020年3月)
- ・「史料紹介『除墨帳』(1)」(長屋佳歩と共編)(『西南学院大学博物館研究紀要』第8号、2020年3月、1-56頁)
- ・単著「書評 吉岡誠也『幕末対外関係と長崎』」(『中央史学』43号、2020年3月)

講演・学会

- ・「踏絵の実態と歴史的意義」長崎学ネットワーク会議公開学習会、長崎歴史文化博物館、2019年11月14日
- ・「江戸時代中期における長崎奉行所の司法管轄」比較国制史研究会、福岡リーセントホテル、2020年1月11日
- ・「上天草市の歴史」上天草市いきいき成人大学、松島総合センター「アロマ」、2020年1月23日
- ・「潜伏キリシタンの発覚～天草崩れ」くまもと県民カレッジ熊本学(世界遺産)コース、くまもと県民交流館パレア、2020年2月12日
- ・「古文書入門」熊本市東部公民会自治会、2019年度毎月第1・第3水曜日
- ・「古文書を読む」NHKカルチャー熊本教室、2019年度毎月第1・3金曜日

4. 講演要旨

- (1) 稲葉継陽 細川幽斎「古今伝授」と「天下統一」
- (2) 今村直樹 細川家歴代当主の甲冑と明治維新
- (3) 後藤典子 1620年代 細川家の葡萄酒製造とその背景

細川幽齋 「古今伝授」と「天下統一」

2019年9月28日 永青文庫 所蔵古文書セミナー
熊本大学永青文庫研究センター 稲葉 継陽

1. 「天下泰平」の世界史的特質—ヨーロッパとの比較—

細川幽齋の歴史上の大きな役割を考えるために

- (1) 200年間以上にわたる長期平和＝「天下泰平」が実現…日本の「近代」に多大な影響
- (2) 民衆（「百姓」）の武装解除は実現されず、その武装権及び武器行使権が長期抑制された
⇒江戸時代の「百姓一揆」は非暴力的な民衆運動←戦国時代までの「土一揆」
- (3) 諸大名の軍隊の中央政府による解体再編はなされないまま、諸大名の交戦権が長期凍結された
…「天下惣無事」を長期維持した日本の近世国家の特殊性

2. 幽齋（藤孝）登場

- (1) 誕生・婚姻と家臣団形成
將軍直臣の家（一流の武家）と学問の家（最高の学者の家）との間に誕生、細川家を継承
⇒いわゆる「文武両道」を極めることは幽齋の宿命
若狭国熊川宿を本拠とする將軍直臣沼田光兼の娘と婚姻、光兼の娘たちと婚姻した畿内の幕臣たちが藤孝家臣団を形成→勝龍寺城跡にのこる「沼田丸」「松井屋敷」「米田屋敷」「築山屋敷」
- (2) 將軍に奉公
13代將軍足利義輝に奉公、三好長慶と義輝が対立し、義輝とともに近江各地を移動、永禄8年（1565）には將軍義輝が殺害され、藤孝らは弟の義昭（後の15代將軍）とともに近江そして越前へ
⇒藤孝の使命：義昭京都復帰に奉仕する意思と実力を有する畿内周辺の大名と、義昭とを結び付けること

3. 藤孝による信長・秀吉の選択と古今伝授

- (1) 信長・義昭連合政権の成立から崩壊へ
藤孝、將軍取次として畿内近国・北国を移動しながら諸国の大名と足利義昭とのパイプ役を果たす
信長と足利義昭を結び付け、信長と明智光秀を結び付け、信長・連合政権樹立の立役者となる
⇒程なく両者は決裂、信長を選択し、京郊西岡青龍寺城にあつて信長を支える
- (2) 「土一揆」（一向一揆）との全面対決、そして古今伝授
武士領主と百姓とが徹底的に武力対立した日本歴史上の特殊な10年間、藤孝はその最前線に
⇒江戸時代における武士領主と百姓との「平和契約」が確立する前提としての10年
誰を殺し、誰を助けるかという、究極の判断を迫られ続けた藤孝
⇒藤孝はこの過程で三条西実枝から古今伝授をうける
「古今伝授」…歌学上の特殊な故実や難解な和歌に関する解釈などを宗教的儀式を通して師資相承していくこと
室町時代、古今伝授の体系は吉田神道と結び付きを強め、初の勅撰和歌集である古今和歌集の体系に表現される
天皇制的位階・官職秩序の総体（伝統的国制）を神代に遡って権威化…吉田神社神主の吉田兼見は藤孝の従兄弟！
⇒それは世代を超えて秘伝されていくべき国家統合の権威的＝文化的核心
- (3) 丹後国替と近世的統治—検地と石高制、光秀との協力のもとで—
 - a 村高の確定
村ごとの耕地面積（←検地・指出）×基準石盛（斗代）＝村高…百姓（村）の年貢・諸役負担基準値
斗代は上田で1.5石、これは戦国時代の年貢と地主取分を合計した額として一般的
 - b 家臣への知行割
家臣（丹後在来の領主を含む）には知行地を村高として宛がう＝知行高…藤孝に対する軍役負担基準値

- (4) 「本能寺の変」と藤孝
光秀らによる村高・知行高に基づく領内動員と、それに基づかない信長の軍事動員との間の矛盾が限界に達着
光秀との権力関係・姻戚関係にもかかわらず、秀吉を選択
⇒家督を忠興に譲り、みずからは古今伝授継承者として利休とともに豊臣政権の文化的プレーンへ
※ 藤孝は光秀の謀反を知っていた？ →豊臣政権の成立と細川家による光秀鎮魂

4. 秀吉の「天下（全国）惣無事」と幽齋

- (1) 諸大名の即事停戦・領土裁定の受諾と引き換えに領域支配権を保障し、秀吉と諸大名との主従関係を結ぶ
⇒「天下惣無事」＝秀吉の「天下統一」の基調政策
- (2) 島津家への「惣無事令」の伝達・受諾に国家統合の文化的権威たる立場から尽力
⇒「由来無き仁」秀吉にとって幽齋らの存在は不可欠、九州の豊臣化実現の歴史的意味は重大

5. 徳川幕府の完成と幽齋

- (1) 関ヶ原の危機
慶長3年（1598）の秀吉死後、忠興は家康との結び付きを強めて石田派と激しく対立、三成は開戦直後の慶長5年7月に大坂の細川屋敷（ガラシヤ）と細川領国丹後（幽齋の田辺城）を狙い撃ち！
⇒幽齋、慶長5年3～4月に智仁親王に古今伝授、4～5月には古来の和歌に関する書籍28冊を集中的に書写
田辺城籠城を耐える→中世的文化権威を江戸時代へと橋渡し
- (2) 新たな幕府への貢献
慶長12年（1607）、幽齋は家康の求めに応じ、手元の武家故実書をもとに『室町家式』をまとめて提出し、室町幕臣時代の同僚を徳川將軍家右筆に推挙するなど人材を提供
⇒徳川將軍を中心とした諸大名の序列、文書発給、儀礼、京都との関係等、伝統的武家規範の確立によって、徳川幕府（將軍）が「天下惣無事」を維持しうる権力として完成される

6. 幽齋の学芸・武家故実と天下統一

幽齋（藤孝）は室町幕府衰退期→信長・義昭連合政権解体期→「土一揆」との対決期に、幕府故実書を集収し、古今伝授をうけ、慶長5年の内戦に際して多くの文学書を書写するとともに王家に古今伝授
⇒中世国家（室町幕府体制）の崩壊過程から前代未聞の内戦、そして江戸幕府成立への過程は、中世的学芸・規範消滅の危機
その間の幽齋の幕府故実書確保と学芸修業は、室町期的な公武統一王権による国家統合の金冠部分をまもろうとする意識的な営為、その蓄積が近世国家の成立に際して呼び出され、重大な役割を果たした

【参考文献】

- 熊本県立美術館図録『没後400年・古今伝授の間修復記念 細川幽齋展』（2010年）
熊本大学文学部附属永青文庫研究センター監修『武將 幽齋と信長』（熊本日日新聞社、2011年）
『細川幽齋と舞鶴』（舞鶴市、2013年）
三輪正胤『歌学秘伝の研究』風間書房、1994年

細川家歴代当主の甲冑と明治維新

2019/06/01 於 日本女子大学 新泉山館
熊本大学永青文庫研究センター 今村 直樹

はじめに

基本テーマ 近世の熊本城で保管されていた細川家歴代当主の甲冑は、明治維新という大変革を経て、その後、どのような変遷をたどったのか。熊本地震を契機に明らかになった研究成果を報告

キーワード 細川家、甲冑、熊本城、明治維新、旧家臣、永青文庫細川家文書

◇ 本報告の問題意識—近世の城郭や大名家が迎えた「維新」とは？

- ・ 近世の城は、城主たる将軍や大名たちの軍事拠点。膨大な兵糧・鉄炮・玉薬・武具等が常備
- ・ But 明治2年(1869)6月の版籍奉還後、「封建遺制」とされた近世城郭の取り壊しが開始。明治4年7月の廃藩置県を経て、旧大名家は城から退去。その後、一部の城郭は「廃城」扱いに
→明治維新は、近世の城郭や大名家の存立条件に大きな変更を迫る。本報告では、城で保管されていた大名家の武具に着目することで、城郭や大名家にとっての「維新」を考える

◇ 本研究の直接の起点—熊本地震後の被災資料レスキュー活動からの「発見」

- ・ 2017年4月、熊本被災史料レスキューネットワーク(熊本史料ネット)による被災資料(大矢野家甲冑)の救出。甲冑には「宣紀公」「一番」の木札あり
→その直後、永青文庫細川家文書(熊本大学附属図書館寄託)から明治5年4月付の細川宣紀甲冑預かり証書が確認【史料1】

◇ 細川家文書や関連史料の研究から明らかになったこと

- ・ 旧家臣による甲冑類の預かり証書は細川家文書に203通も存在、廃藩置県の直後に集中
- ・ 廃藩後、多くの甲冑が旧家臣に預けられ、さらに西南戦争の戦災等も経験したことが判明
→なぜ、廃藩後の細川家は甲冑を旧家臣に預けたのか？甲冑たちが経験した近現代史とは？

1. 近世の細川家当主所用甲冑と熊本城

(1) 細川家当主甲冑の管理と熊本城

- ・ 近世前期から、熊本城天守には兵糧・鉄炮・玉薬・武具等が常備(加藤時代のものも存在)
- ・ 近世中期以降、細川家当主の甲冑を含む武具類は、藩政部局(城内方)管轄下の天守方が管理
→天守方役人の服務規程【史料2・3】…天守に納められた武具の出納や修復を担当
* 文化10年(1813)には武具類の現有状況調査が実施【史料4】、当時の天守方が管理した細川家歴代当主の甲冑類の一覧【表1】。文政11年(1828)には甲冑類の図冊も作成
→細川家当主の甲冑類は、天守方の管理のもと、熊本城天守で保管されていたことが明らか

(2) 熊本城と明治維新

- ・ 明治3年9月の藩知事細川護久による熊本城の破却申請…「戦国之余物」「旧習」の払拭のため
→熊本藩は同年閏10月、身分や男女の別なく「御城拝見」を許可すると領内に通達【史料5】。
一般開放された熊本城の見物客によれば、小天守には多くの兵器と甲冑類が保管【史料6】
- ・ 明治4年7月に突如断行された廃藩置県(新しく熊本県が設置)
* 「大變茫然如夢」と涙しながら酒を飲んだ熊本藩士の上田休(久兵衛、後述)¹
- ・ 熊本では、花畑邸(細川邸)内の旧藩庁が県庁に移行。県の首脳部は、依然、旧細川家臣が占有
- ・ 明治4年8月兵部省による東京・大阪・鎮西・東北鎮台の設置、熊本には鎮西鎮台の本営が設置
→新しい鎮台の兵営が花畑邸に置かれることになったため、明治4年末には、県庁と細川邸は熊本城二の丸に移転。県庁は明治5年6月まで、細川邸は同年10月まで二の丸に存在

2. 廃藩置県後の細川家当主所用甲冑と旧家臣

(1) 旧家臣による甲冑の預かり願い

- ・ 鎮台への熊本城引き渡しに伴い、城内で保管されていた書類や武具類の処遇が大きな問題に
→城内の「大砲」は明治5年1月に「外庫」へ運び出され、「器械」の扱いは当面保留に²
- ・ 他方、廃藩置県の直後から、多くの旧家臣が歴代当主の甲冑の預かり願いを提出(約100通)
→大矢野次郎八の場合、歴代の武器が処分されると聞き、具足の預かり願いを提出【史料7】
- ・ 明治5年3月以降、旧家臣による甲冑類の預かりが開始(同年4・11月、翌6年に集中)
→甲冑類の保管場所を失った細川家と、御家の「宝」を預かる名誉を得た旧家臣の利害が一致

(2) 甲冑はいかにして預けられたか？

① 松井新次郎(盈之、八代城代、知行3万石)の場合

- ・ 明治5年3月27日、甲冑の引き渡しについて、熊本詰の家令鬼塚源馬から通知【史料8-(a)】。引き渡し場所は、熊本城内の宮内邸【史料8-(e)】。松井側が預かった忠利(肥後細川家3代当主)の具足一領を確認したところ、佩楯と臈当が不足していたので問い合わせると、鬼塚からは預かり証書に不足の品を書き加えるようにとの指示【史料8-(c)】。甲冑が忠利のお召し品であるか疑問があるが、鬼塚方によると「御実用」に見えるとの返答【史料8-(d)】

② 池辺吉十郎(知行200石、西南戦争では熊本隊を組織)の場合

- ・ 彼は、明治5年1月に甲冑の預かりを願う。願いが聞き届けられ、4月24日に「岩佐家」にて甲冑を受け取り、預かり証書を提出【史料9】。甲冑の引き渡し場所としての旧家臣宅が使用

③ 上田休(久兵衛、幕末の京都留守居、知行200石、西南戦争後に非業の死)の場合

- ・ 知人が預かった綱利所用の甲冑を見て、「我、細川氏の臣、嗚呼忘れることなきのみ³」と感激

(3) どのような人びとに預けられたか？

- ・ 預けられた甲冑類…肥後細川家2代当主の忠興から14代の護久まで歴代当主などの所用品

¹ 「上田久兵衛日記 十九」(東京大学史料編纂所蔵「維新史料引継本」I 13-1500-19)。写本。

² 「日誌 自明治四年至全五年」(熊本県公文類纂17-77、熊本県立図書館蔵)。

³ 「上田久兵衛日記 二十」(東京大学史料編纂所蔵「維新史料引継本」I 13-1500-20)。写本。

→具体的には、冑・鎧・小具足・具足下着・陣具・馬具・指揮具など

- ・ 細川家文書における旧家臣の預かり証書は 203 通、実に 198 名が甲冑類を預かる
→細川家家臣の名簿「侍帳」によると、文久 2 年（1862）の知行取総数は約 900 名。その 2 割以上に相当する旧家臣が、甲冑を預かったことに
→甲冑類を預かった人びとの多くは知行 100～300 石クラスの旧家臣（大身家臣に限定されず）
- ・ 幕末維新期の熊本藩の政治史…「学校党」「勤皇党」「実学党」という三党派の対立構造で理解
→廃藩置県後の熊本県政を担っていたのは「実学党」。but 甲冑類は「学校党」（松井・池辺・小橋元雄など）を中心に、「勤皇党」の関係者にも預けられる
→甲冑を預かった後、士族反乱（神風連の乱、西南戦争）に参加した人物も多数存在（後述）

3. 甲冑と旧家臣たちの近現代史

(1) 代替わり証書の提出

- ・ 甲冑類の預かり証書には、「代替わりの際は、証書を書き換えて提出」という一文あり
→旧家臣の家で代替わりする際、新たな当主名での証書を細川家に再提出することを約束
- ・ 細川家文書からは、いくつかの代替わり証書の存在が確認可能
→9 代当主治年の具足を預かった岩崎實蔵（切米 10 石 3 人扶持）が病死したため、その子の岩崎悦子は後見人とともに証書を提出【史料 10】
→旧家臣の家が代替わり証書などを提出することは、「細川家中」が解体した廃藩後において、旧主細川家との紐帯を再確認する重要な機会に

(2) 西南戦争と甲冑・旧家臣

- ・ 廃藩後の旧家臣と預けられた甲冑類…最初の大きな危機は、明治 10 年に勃発した西南戦争
- ・ 甲冑を預かった旧家臣には、明治 9 年の神風連の乱のほか、明治 10 年の西南戦争に深く関わった人びとが多く存在
→熊本隊（旧学校党関係者で構成）として薩摩軍に加わった、前述の池辺吉十郎のほか、田屋誠一郎・宮川貞衛・大矢野次郎八たち
- ・ 一方で預かった甲冑類が戦災で焼失し、その旨を細川家に報告・謝罪した事例も存在
→熊本隊に参加した息子の「家出」中、無人家屋に残された武具類が、戦災で焼失したことに對する細川家への謝罪【史料 11】
→熊本城攻防戦による兵火により、預かった忠利などの具足が焼失したことへの謝罪【史料 12】
→西南戦争は、旧細川家臣とともに、彼らに預けられた甲冑類にも多大な被害をもたらす

(3) 旧家臣による甲冑の返納

- ・ 西南戦争により甚大な戦禍がもたらされた旧熊本城下町…旧家臣たちの家屋も大きく被災
→戦後、旧家臣には保管場所の確保が困難となり、甲冑類を細川家に返納する者も【史料 13】
- ・ 明治 12 年 10 月に旧家臣の清田氏（知行 300 石）が提出した、甲冑類の自主返納願【史料 14】
→保管場所が「無用心」である点と、廃藩時と比べた世情の安定を理由に挙げ、甲冑類を返納

→廃藩直後の混乱期、旧主家の「宝」を守ろうとして甲冑を預かった旧家臣の姿

- ・ 現在、熊本県立美術館が保管する永青文庫資料には、旧家臣から返納された甲冑類が存在
→甲冑番号（木札等）の一致。甲冑の収納箱には、明治 30 年代に細川家に取り納めた旨が明記
→上記の甲冑類は、細川家北岡邸の蔵（明治期）→熊本城の十八軒櫓（昭和期）→熊本県立美術館（昭和 50 年代）というルートを通ったと推測

おわりに

(1) 本報告の意義

- ・ 熊本地震後の被災資料レスキュー活動を契機に、近代細川家・旧家臣に関する新事実が解明
→熊本県立美術館が保管する永青文庫資料群の形成過程の一端が解明された点も大きな収穫
- ・ 廃藩後の混乱期、大量の甲冑類を旧家臣に預ける事例は全国的にも初見…比較研究の必要性
→近世城郭という保管場所を失った旧大名家の宝物や武具類が、どのように近代へ継承、あるいは継承されなかったかという問題は、明治維新史にも新たな研究視角を提供するもの

(2) 旧家臣たちが守った甲冑と細川家文書

- ・ 廃藩後の細川家歴代当主の甲冑類を守った主体…預かりを願い出、自宅で保管した旧家臣たち
→甲冑類を預けるに際し、熊本詰の細川家の家令（旧家臣）が中心になっている事実も要注目
→それでは、なぜ、旧家臣たちは、混乱期の社会で旧主家の「宝」を守ろうとしたのか？
- ・ 現在の永青文庫細川家文書の藩政史料群…実は、これも廃藩後に旧家臣たちが守り抜いたもの
→廃藩後、藩政史料の散逸を憂いた旧家臣は、明治 5 年 6 月、熊本県庁が継承した藩政史料を「玉石不撰」に譲り受けるとともに、散逸した分も買い上げ、文書目録を作成【史料 15】
→その理由は、他藩から注目された熊本藩の治績を後世に伝え、後日「国史編纂」に資するため
▽ 「旧細川家家臣」というアイデンティティにも支えられ、守り抜かれた細川家の史資料群

参考文献

- ・ 稲葉継陽「熊本大学寄託永青文庫細川家史資料の構成と歴史的位罫」（森正人・稲葉継陽編『細川家の歴史資料と書籍』吉川弘文館、2013 年）
- ・ 今村直樹「廃藩置県後の細川家当主所用甲冑と旧家臣」（『永青文庫研究』創刊号、2018 年）
- ・ 後藤典子『熊本城の被災修復と細川忠利』熊日新書、2017 年
- ・ 三澤純「19 世紀の藩社会と民衆意識」（『日本史研究』464、2001 年）
- ・ 森山英一『名城と維新』日本城郭資料館出版会、1970 年
- ・ 熊本大学文学部附属永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 故実・武芸編』吉川弘文館、2014 年
- ・ 熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 熊本藩役職編』吉川弘文館、2019 年
- ・ 『永青文庫所蔵資料調査報告書 第 1 集 -武器と武具-』熊本県立美術館、2012 年

1620年代 細川家の葡萄酒製造とその背景

永青文庫所蔵古文書セミナー 於 日本女子大学 新泉山館
2019 (令和元) 年 5 月 12 日 熊本大学永青文庫研究センター 後藤 典子

はじめに

▼自己紹介

熊本大学永青文庫研究センター…永青文庫細川家の古文書約6万点の調査研究

⇒一次史料、つまりその時代にリアルタイムに書かれた史料の宝庫

細川家小倉時代の寛永4年(1627)から寛永7年にかけて、「葡萄酒」を製造していたことが明らかに

▼小倉を「ワイン特区」に!

⇒面白おかしくしてしまうマスコミ報道と史実との乖離、一次史料による事実の確定が必要!

1 葡萄酒製造を伝える一次史料

小倉藩主細川忠利(1586~1641)の命による葡萄酒製造が一次史料の上で確定できるのは寛永4年(1627)年から7年(1630)までの4年間、すべてを紹介

(1) 寛永5年の葡萄酒造り

【史料1】「奉書」寛永5年8月28日条

ぶどう酒を作り申時分にて候間、上田太郎右衛門尉ニ便宜次第申遣、作せ可申旨 御意之由、斎奉之由にて野田源四郎申来候事、

【史料2】「奉書」同年9月15日条

①ぶとう酒仕様、上田忠蔵ニおしへ可申旨、太郎右衛門ニ被仰渡由、治部丞奉、自然忠蔵煩之時なとノためニ被為思召候間、歩之御小性衆ノ内、慥成者ニ一人おしへ可申旨、奉同人、

(肩書)上田忠蔵ニ申渡候、又、歩之御小性ハ赤尾茂兵衛ニ申渡候

②太郎右衛門、ぶだうヲ取ニ在郷へ参、手廻能候ハ手傳を付、可遣旨、治部奉、

【史料3】「奉行所日帳」同年9月15日条

上田太郎右衛門ニ中津郡ニ而、ぶどう酒被成御作候手傳ニ、御鉄炮友田二郎兵衛与中村源丞遣候、御郡ニ而がらミ・薪ノちんとして、五匁錢五貫文ヲ遣候、又、歩之御小性赤尾茂兵衛ハ、右之さけ作ならひ候へと申付遣、今度ハ江戸へ上田忠蔵被 召連候、太郎右衛門ハ忠蔵ニ作様をしへ遣申候へきとの 御意ニ候、忠蔵煩、其外之時之ためニ、歩之御小性ニをしへ候へと被 仰出ニ付、御供番三与ノ内ハ丈夫成仁を改、被出候へと申ニ付、赤尾茂兵衛をさし上候、則申渡、太郎右衛門所へ遣候事、

【史料4】同年9月16日付 惣奉行衆達書 仲津郡奉行宛

上田太郎右衛門知行所にてぶたう酒御作せ被成ニ付而、爰元ハさけ作申道具、次夫三人にて主知行所へ遣申候、兵糧可被相渡との状遣候、但、当郡ハ中津郡迄ニ当遣候也、

【史料5】「奉書」同年9月24日条

ぶだう酒、去年江戸へ被遣候程、当年も可被遣様と、得 御説申候、并諸白も口ニ無御座候間、御奥ハ被成御出候様と、佐膳殿を以得 御意候処ニ、此方次第と被仰出候事、

【読み取れる事実】

▼寛永5年8月28日、葡萄酒を造る時分になったので、上田太郎右衛門に命じて、上田の知行所の中津郡で、がらみを採らせ、葡萄酒を造らせるようにと、藩主忠利より命令が出て、その手伝いに御鉄炮衆の中村源丞が遣わされ、がらみ・薪の代金として五匁錢五貫文が支給

▼太郎右衛門の甥忠蔵と歩之御小性赤尾茂兵衛が、太郎右衛門から葡萄酒の造り方を習うように命じられた

(2) 寛永6年の葡萄酒造り

【史料6】寛永6年9月15日付 惣奉行衆達書 仲津郡奉行宛

当年も上田太郎右衛門尉ニぶだう酒被仰付候、如去年、がらミを御郡夫ニ取せ可被申候、御奉行ニ御鉄炮衆差出申候間、切手を取置御定之賃米請取候へと可被仰付候、

【史料7】「奉行所日帳」同年9月18日条

御小人孫介ニ、ふたう酒作こミ候樽式つ、上田太郎右衛門所へ持せ遣候、右孫介カヘリニ、太郎右衛門口上にて被申越候ハ、黒大つ并手伝無御越候、併、何も此方にて調可申由、被申由候事、

【史料8】「奉行所日帳」同年10月朔日条

上田太郎右衛門尉、ふたう酒式樽被仕上候、手伝ニハ、竹内与谷口次左衛門尉と申者也、中津郡ハ今晚持せ来候事、

【読み取れる事実】

▼上田太郎右衛門が葡萄酒造りを命じられて、材料のがらみ採りに地元の百姓が郡夫として駆り出され、賃米が支給、小倉から仕込み用の樽2つが運ばれた(二斗樽=約360ℓ)、2樽の葡萄酒が出来た

▼「黒大豆」に使用

がらみの発酵を促進する材料ではないか:大豆の酵母を添加して発酵を助けたのでは

⇒この「葡萄酒」はがらみを単に酒類に漬けたものではなく、醸造酒であった可能性が高い

▼樽を小倉から運んでから約2週間経って葡萄酒が仕上がりに、10月朔日、樽2つ分が小倉に送られた

(3) 寛永7年の葡萄酒造り

【史料9】「奉行所日帳」寛永7年4月7日条

上田太郎右衛門所へ、ふとう酒作候手伝ニ、芦田与兵衛与中橋孫右衛門付也、右酒作候奉行ニ、高並権平遣也、

【史料10】「奉行所日帳」同年4月14日条

歩之御小性海田半兵衛登城にて被申候者、今度ぶどう酒の御奉行に、高並権平被仰付候へとも、まへかとハ拙者仕つけ申候ニ付而、歩之頭共ハ差替申候由にて登城仕候、可然候由、申渡候也、

【史料11】同年8月16日 惣奉行衆達書 仲津郡奉行宛

中津郡大村にて、ふたう酒御作せ被成候間、如去年上田太郎右衛門被申次第、御百生ニからミを御取せ候而、被相渡がらミノ代米其地にてすくニ可被相渡候、

【読み取れる事実】

▼葡萄酒造りの担当の奉行はある程度専門性が必要で、特化した役職になりつつあった

▼上田太郎右衛門が葡萄酒を造っていた知行地は仲津郡大村(現福岡県京都郡みやこ町)

2 葡萄酒を造る上田太郎右衛門とその一族

(1) 上田太郎右衛門の召抱え

上田太郎右衛門…寛永3年に忠利に新知300石を拝領し、御小姓組に召し加えられる(永青文庫「先祖附」)

【史料12】「奉書」寛永3年(1626)閏4月28日条

上田太郎右衛門儀、可申渡 御意ハ、今程奉公人被召抱儀御法度候へ共、太郎右衛門儀ハ前廉ハ御存之者ノ儀ニ而御座候間、内裏ニ居申候一色十右衛門被遣旨、百性ノ家ニ居候而内作をも仕、小倉ニ罷出候ハ、御扶持方を被下、家なと茂仁合ニ可被遣旨 御説ニ候通申聞せ候処ニ、忝御説共可申上様無御座候、左様ニ御座候ハ、小倉ニ被召置、仁相之御屋敷をも被為拝領候而、御留(守脱カ)之時ハ火用心之御番成共仕度由申上候段、奉御耳候処ニ、小倉ニ居申候ハ、何れの家成共、主見立候而望可申旨被 仰下候事、人数之儀御尋被成候間、式十四五人御座候、馬も壹疋所持申由申上候事、

※「内裏」は現在の福岡県北九州市門司区の南西部、地図を参照

【史料13】「奉書」同年5月7日条

上田忠左衛門尉弟太郎右衛門尉ニ、明八日ハ拾五人扶持、永可相渡 御印切手相調候而、可差上旨式部少殿奉り、⇒太郎右衛門は上田忠左衛門(宇佐郡御郡奉行)の弟、新規召し抱えの根拠に

*同上5月11日条

上田太郎右衛門ニ家望可申由、被 仰出候付、今迄清右衛門居申候明家望申候由申上候、可遣旨被 仰出候事、

*同上10月22日条

上田太郎右衛門儀、右ニ被 召抱候時ニ、当年御知行可被下旨御約束被成候間、明所書付上ケ可申候、其内を以

可被遣旨 御意候事、

*同上 10月23日条

上田太郎右衛門ニ、宮部久三郎・志水市兵衛知行、被遣候事、

⇒上田太郎右衛門は寛永3年(1626)閏4月の新規召し抱え時に知行宛行を約束され、10月23日に仲津郡大村に知行地を拝領、葡萄酒造りは翌年の寛永4年からとみてよい

⇒太郎右衛門は奉公人新規召抱えが公儀法度で禁じられている時期であるにもかかわらず、家・扶持方・知行給付を条件に忠利が内裏でリクルート、彼の特殊技能なり技術なりを特別に評価

(2) 上田一族と南蛮技術

【史料14】元和9年(1623)4月9日付 細川忠利達書 惣奉行衆宛

上田忠左衛門せかれ忠蔵事、ひらどへ遣し、石なとひき候色々のでだて、忠蔵おぢ存候由ニ候間、ひらどへ忠蔵を遣し習はせ可申候、万力(まんりき)と申おもき物を引道具有之由ニ候、をなしくハひらどにて誂、先壺ツ取よせ調法成ものニ候ハ、いかにもかくし候て可申付候、其外何にても左様之きとく成儀候ハ、習候へと可申候、忠蔵奉公にも成候ハをしへ可申由申由承候間、左様之事を存候へは家中共ニ重宝成儀ニ候間、忠蔵ため迄も可然候間、其段、具忠蔵にも可申候、銀之入候儀ハ可申付候、

⇒忠利の指示：上田忠左衛門の倅忠蔵を平戸へ遣わし、石などを引く色々な技術を忠蔵の叔父が知っているので平戸で習わせるように。万力という重い物を引く道具があるそうなので、内緒で習うように。そのような技術は御家にとっても重宝だ

【史料15】元和9年6月5日付 細川忠利達書 惣奉行衆宛

上田忠蔵、平戸へ遣候儀、先差延候由、銀子式貫目請取可参と申候由、やすき儀ニ候、早々可申付候、普請などの儀ニ付而家中之重宝ニて候、さきもの死候ハ成ましく候、又普請之役ニ不立儀ニ極候ハ、忠蔵ニ見候て習申間敷候由可申付候事、

⇒忠利は家臣を平戸に派遣して南蛮の技術や文化を積極的に摂取、「万力」は「南蛮ろくろ」か
上田忠蔵は寛永7年8月26日に御細工奉行に任命、彫り物などの細工物や桐油紙の合羽も手掛ける(永青文庫史料)
燈油紙…桐の油を塗った紙で防水性があり
合羽…語源はポルトガル語、もともとはキリスト教宣教師が着ていた上衣で、江戸時代になると雨具として桐油紙を用いた桐油合羽が用いられる

【史料16】寛永3年2月9日付 惣奉行衆書状 飯田才兵衛(忠利側近)宛

明日上田忠左衛門尉出入、御直ニ可被御尋旨被 仰出候、左様ニ御座候へハ、忠左衛門尉二番めのせかれ加左衛門と申者、平戸ニ忠左衛門弟居申候ニ養子ニ遣置申候が、此中参居申候、又、拾五六ニ成申せかれも壺人御座候、兩人共ニ何もへ御預ケ可被成候哉、奉得 御詫候、

*忠利自筆裁可

御自筆ノ御裏書ニ

平戸のハ他国ノ者候間、人ニあつけ候事成間敷候、今一人ハたれぞニ見合預ケ可申候、平戸のもやと可有之候間、宿方わきへ参間敷由申付、それもいやニ候ハ、帰候へと可申候、

⇒平戸に上田忠左衛門の弟がおり、忠左衛門の二番目の息子が養子に入っている、この平戸の弟こそが上田忠蔵に万力の技術を教えた叔父にあたる

【史料17】「奉書」寛永3年2月23日条

平戸の我貴所へとけいの儀、道倫所方可申遣候、なをし候ハ、取テ可帰候、于今不直候ハ、何と申者ニ渡候哉、其段能承可帰候由、可申候、むさと出入かましく不申様ニとの御意候、上田弟所へも能可申遣旨御意之事、

⇒上田忠左衛門弟、恐らく南蛮時計の修理に関与、南蛮技術に精通

【史料18】寛永4年月日未詳 細川三斎書状 忠利宛

黄飯ノ料理仕者二人給候、我々存候と替り申候間、上田忠左衛門弟、只今可給候、鳥めしをもさせ、又ナンハン料理させて見申度候、

⇒黄飯はキリシタン大名大友宗麟の本拠地豊後臼杵の郷土料理、スペイン料理のパエリアを真似たものだと

いう説あり、上田太郎右衛門は、黄飯や南蛮料理を習得
⇒葡萄酒の造り方も南蛮人から習得していて不思議でない

3 上田太郎右衛門によるアヘンの製造と葡萄酒

(1) アヘンの製造

上田太郎右衛門、葡萄酒や南蛮料理だけではなく薬も製造、さらにアヘンも！ 一次史料で検討

【史料19】「奉行所日帳」寛永6年4月5日条

一 あひん御誘被成御用ニ、浅黄椀拾人前入申候間、上林甚助ニ可有御渡候、そこね申儀にてハ無之由、住江甚兵衛所へ切替遣事、

*同上4月15日条

一 上田太郎右衛門登城にて被申候者、あひん仕候ニ、からかねなべ壺つ入申候間、何方ニ而成共、被仰付候而被下候様ニと、被申候間、有吉頼母殿ニ申遣、かりよせ渡候也、

*同上4月17日条

一 上田太郎右衛門登城にて被申候ハ、あひん悉仕廻申、ほし申迄ニ仕、上林甚介ニ渡置候由、被申候事、

*同上4月19日条

一 上田太郎右衛門尉あひん悉仕舞候、持せ被上候、則林隠岐守へ渡させ候、大小数三拾九丁、内壺丁ハ上々ノ由、残而三十八丁ハなミノ由、具様子、太郎右衛門隠岐へ被申渡候事、但、御天守か、いつれニ成共、風ノ吹候所ニ居可被申由也、

【史料20】同年4月23日付 細川家惣奉行衆書状 飯田才兵衛(忠利側近)宛

一 あひんこしらへ申時分にて御座候ニ付、仕様上田太郎右衛門能存候間、こしらへ可申通申渡、出来仕候、正味拾両又並のあひん拾壺斤三拾目御座候、併次第ニかたまり申候ほとへり申候よし申候、只今可致進上候へとも、今少かたまり候てから上可申と存候而、此度上不申候、

【史料21】同年8月20日付 細川家惣奉行衆書状 飯田才兵衛(忠利側近)宛

あひん大形ひ申候間、大小拾ヲ、此度差上申候、

【史料22】「奉行所日帳」同年9月20日条

一 あひん大小箱ニ入、三百四拾三匁也、

*同上9月23日付 細川忠利達書 惣奉行衆宛

一 あひん大小拾、請取候事、

[読み取れる事実]

▼忠利の指示で上田太郎右衛門がアヘンを製造、植林・花の栽培や薬膳作成に携わる家臣上林甚助が関与
アヘンは唐金の鍋で抽出して乾燥、大小39丁(枚)、内1丁は上々の品、残りの38丁は並の品
正味10両(375g)、並のアヘンが11斤30目(6.7kg)、充分乾燥させ、8月20日、アヘンを江戸に送る
「あひん大小箱に入れ、343匁」=約1.3kg

▼4月23日付の史料の中に「あひんこしらへ申時分にて御座候ニ付」とあることから、それ以前にも造っていた可能性はある

⇒日本におけるアヘン製造の確実な史料は元禄期か、細川家のアヘン製造記録は一次史料としては初見となるか

(2) 薬酒としての葡萄酒

忠利は葡萄酒を薬酒(「くすりさけ」として製造させた←忍冬酒、人参酒なども製造(永青文庫史料)

寛永15年(1638)の天草・島原の一揆の時、体調不良をおして参陣した忠利は陣中から熊本にある葡萄酒を送るよう依頼

【史料23】寛永17年(1640)8月7日付 細川忠利書状 有馬直純(日向延岡藩主)宛

御気色しかと無之由ニ付而、ぶとう酒参度由、我等給あまし江戸ニ置候而、此方へ持而参給かけ候入物共、印判を口ニおし進之候、事之外薬とハ覚申候、

⇒葡萄酒は薬として重宝

【トピック：薬師としての上田太郎右衛門】

【史料 24】寛永 7 年（1630）3 月 12 日付 惣奉行衆達書 上田太郎右衛門宛

為 御意申入候、中津下村已安、腫物被相煩ニ付、八喜慶閑一昨日被遣候処、大事之腫物ニ而慶閑療治ニも難成
通被申候ハ、就夫明日貴殿中津へ早々被参、療治可被仕旨、被 仰出候間、被得其意、早々可有御越候、

【史料 25】同年 3 月 14 日付 中津家老衆書状 小倉惣奉行衆宛

上田太郎右衛門殿被差下候、已安忝次第難申上候、則慶閑と談合被仕、昨晚方内業あたへ被申候、又一昨夜慶閑炎
を被仕候へハ、それにてうミ殊外出来申、一段甘申候へ共、うミ出申ゆへにて御座候や、其身気力少おとり申候、長々の
儀ニ御座候へハ、身ふしも所々痛申候を今ほと覚申付、両人之内業当り申様ニ主申候、定而御兩人ハ内業之儀斟酌可
被申候へ共、其段ハ皆共方已安ニ申聞せ御兩人之内業たべさせ可申候、

⇒外科の八喜慶閑が切開などの外科的治療をした後、内服薬として太郎右衛門がつくったアヘンを使ったので
はないか…アヘンの製造はこの前年

⇒アヘンは強力な痛み止めだが大変危険な薬、故に使用を躊躇

⇒下村已安は 2 日後に死去…「この外科の医者たちの薬に中って死んだのではない。病気が重かったから薬が
中ったのだ」（中津家老衆書状 惣奉行衆宛）、唐人からの輸入アヘンも忠利が品質を厳しくチェック

⇒南蛮技術に明るい医師、薬師として忠利に召し抱えられた上田太郎右衛門

おわりに—細川家葡萄酒の消滅—

▼細川家製造の葡萄酒が消えていった理由はなにか

【史料 26】寛永 15 年（1638）6 月 25 日付 細川忠利書状 真田信之（信州松代藩主）宛

葡萄酒御用之由、肥後守所迄被仰越由ニ而、申越候、内々貴様御すきと存候間、長崎をも尋させ候へ共、きりしたんを
すゝめ候時入申酒にて御座候とて、それを氣遣、わきニハ一圓賣買無御座候、今程舟一そう参候へ共、未口明不申候故
無御座候、廿年計以前ニ参葡萄酒にて、去年我等ニくれ申候を給候て、残を壺ニ入、江戸ニ召置候様ニ覚申候間、ぶ
どう酒ハ少御座候も不存候へ共、壺なから進之候へと申遣候間、誘以下むさと仕たる躰ニ而可有御座候、

⇒忠利曰く「長崎にも問い合わせてみたが、葡萄酒はキリシタンを勧める時に要る酒なので一切売買がない」
キリシタン禁教令…慶長 17 年（1612）に天領に出され、翌 18 年には全国的へ

▼細川家ではすでに慶長 15（1610）・6 年の段階でキリシタン庇護から迫害へ転向、忠利の葡萄酒はガラシャの
ミサなどとはまったく関係ない

▼ではなぜ禁教令の中で造ったか…薬酒としての効能がそれほど大きかったのではないか

【史料 27】寛永 11 年閏 7 月 19 日付 細川忠利書状 榊原職直宛

ふたう酒にて候哉、南蛮之樽共ニ被下候、扱も〳誘誠之南蛮物にて候、酒を給候へハ、ふたう酒にて無之候、終ニ
たへ不覚味にて候、是もふたう酒にて御座候哉、必御返事ニ待入候事、

⇒信州の真田信之は本当に葡萄酒好き、寛永 18 年（1641）忠利が亡くなった後、息子の光尚は弔問の御札に葡
萄酒 1 樽を真田の江戸屋敷に届けた（永青文庫史料）

▼幕府によるキリシタン禁教は益々熾烈なものとなり、細川忠利はその最前線に立ってキリシタンの撲滅に奔走
さらなる強化を幕府に提言（後藤 2019）

⇒キリスト教禁教によるいわゆる鎖国という時代の暗雲の中で葡萄酒造りは消滅（抹殺）

【講演のまとめ】

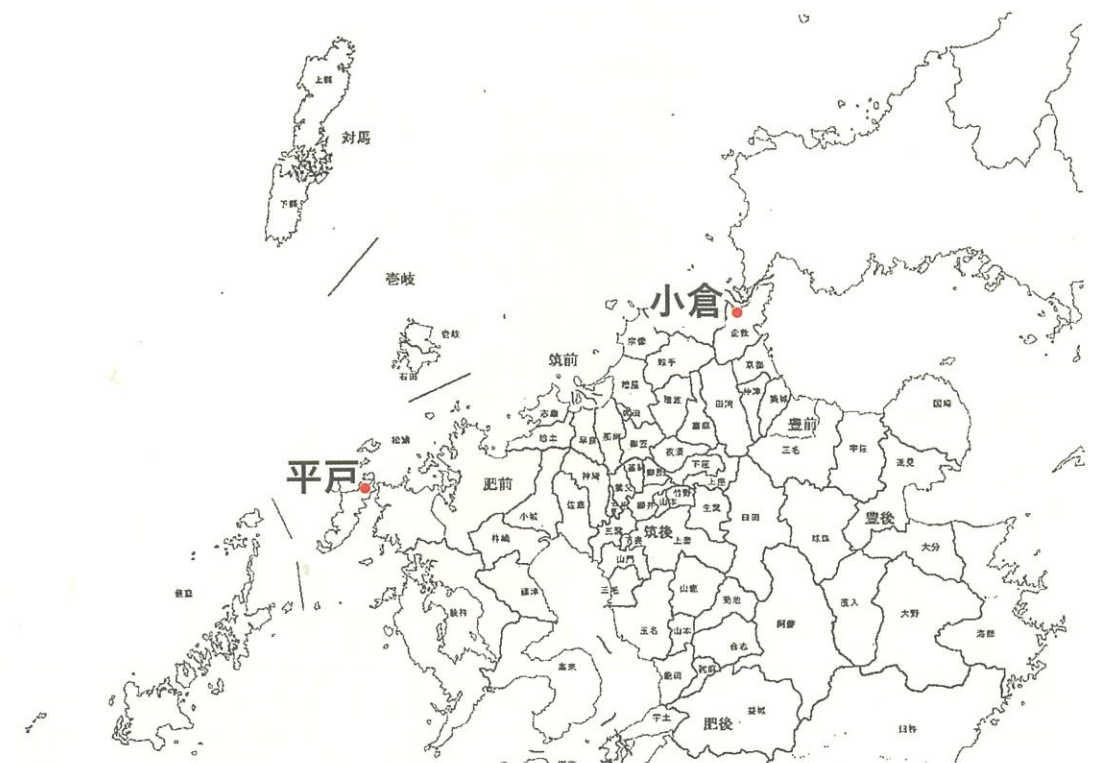
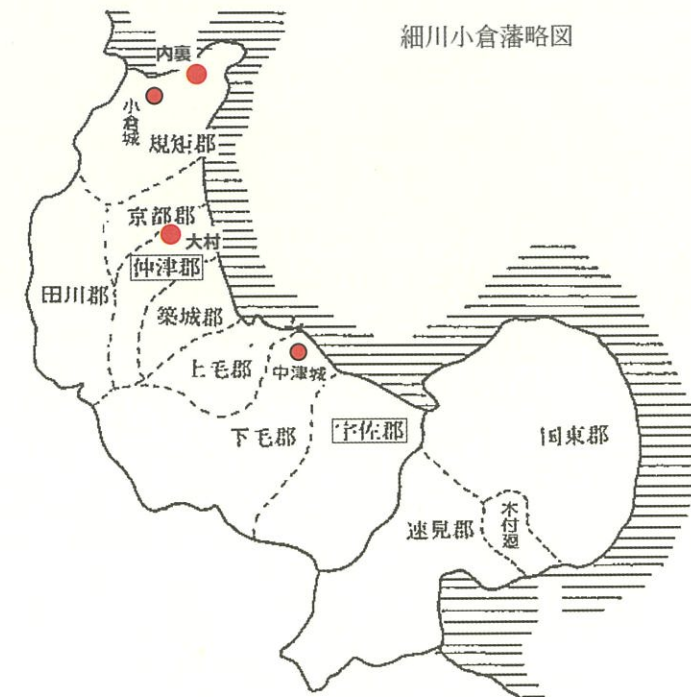
1. 細川家で造られた葡萄酒は、北部九州在来のがらみ（山ぶどう）を使って、黒大豆を材料にして発酵を促進させた醸造酒であったと判断されること
2. 葡萄酒を造ったのは、寛永 4 年（1627）から 7 年までの短い期間に限られること。この時期はキリシタン禁教が厳しくなる時期であり、細川家の葡萄酒製造はガラシャのミサなどとはまったく関係ないこと
3. 葡萄酒はキリシタンを勧める時に必要な酒だと認識されていたので、キリシタン禁教が厳しくなる過程では、忠利もその製造は危険な行為だと認識していたこと。それでも忠利が葡萄酒づくりを命じたのは、薬としての効能を高く評価していたからだということ
4. 葡萄酒を造った上田太郎右衛門とその一族は、南蛮文化や技術を身に付けた者たちであり、忠利は少々の無

理をしてでも上田をリクルートすることによって、彼らを通じて積極的に南蛮の文化や技術を取り入れ、自国のものにしようとしていたこと。それが、大航海時代の終焉の時期における、長崎に近い西国大名たちの姿であったこと

【参考文献】

後藤典子「小倉藩細川家の葡萄酒造りとその背景」（『永青文庫研究』創刊号、2018 年）

後藤典子「島原・天草一揆以前における肥後細川家のキリスト教政策（上）」（『永青文庫研究』2、2019 年）



永青文庫研究センター年報

第11号 (2019年度)

発行日：2020年3月31日

発行者：熊本大学永青文庫研究センター

〒860-8555

熊本市中央区黒髪2-40-1

TEL 096-342-2304

印刷所：シモダ印刷株式会社